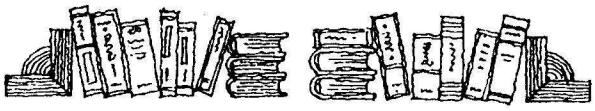
日本女子大学

国語国文学会だより



No. 24　　2001. 3

日本文学科卒業生の会

国語国文学会 平成十二年秋季大会 研究発表・公開講演会 報告

平成十二年十二月二日(土)、国語国文学会秋季大会を八十年館八五一教室において開催した。

◆午前の部（研究発表）十時～十二時

「宇治十帖の和歌の機能―独詠歌を中心として」
本学博士課程前期二年次　斉藤由紀子氏

「浮世草子の忠臣蔵物について」
本学博士課程前期一年次　宮本祐規子氏

「小林秀雄　モオツアルト論――P・ヴァレリー・河上徹太郎からの受容」
本学博士課程前期一年次　鈴木　美穂氏

◆午後の部（公開講演会）十三時～十六時

「日本語の対話における聞き手の役割」
本学　田辺和子助教授

少女漫画家大和和紀先生を囲んで
―「あさきゆめみし」と「源氏物語」―
後藤祥子教授、高野晴代氏（新24院14）、
廬亨美氏（院生）、小野真琴氏（学部生）
による座談会

懇親会　於　生協食堂ウィミン

日本語の対話における聞き手の役割

本学助教授　**田辺　和子**

日本語の対話の特徴として、よく話題に出されるのが、相槌の仕方である。相手の話の途中でも、「そうね。」とか「ああ」、「ふうん」といった相槌をよくする。英語の対話においては、話の途中で口をはさむことは、話し手にとって、わずらわしいと受け取られる傾向が見られるが、日本語では、けっして話し手にとって、うっとうしいものではなく、むしろ聞き手が自分の話を聞いてくれている確認になり、互いに対話のリズムを作り出す上で、必要不可欠なものとなっている。このような日本語の対話の特徴について水谷（一九八三）は、「日本人の話し方の特徴は、共同して話を作るという態度である。ひとりが自分の話を終わりまで述べて次に、他の一人が、自分の話を終わりまで述べて、つぎの他のひとりが改めて自分の考えを述べ始めるより、二人が補い合い、励まし合いながら話の流れを作っていく態度が基本になっている。この意味では、対話ではなく、共話とでもいいたい。」と指摘している。この共話という特徴は、その後、談話研究がさかんになり科学的に人の話が分析されるようになって、実証されている。

話し手が聞き手に対して、共感や同調を強く求めることは、日本語の談話構造そのものにも、その特徴が見られる。ここでは、「～てくる」の使用について考察してみよう。

・例文一「今日、武の担任の先生に会ってきたわ。」
・例文二「今日、武の担任の先生に会ったわ。」

例文一では、話し手と武の担任があらかじめ約束しておいて、面談したという状況が想像できるが、例文二においては、街中で、偶然会って会釈をかわした程度でも使用可能な表現である。例文一では、さらに、この後、武の教育問題について、話を続けようとする話し手の強い意志を感じとることができる。

・例文三「セーター、買ってきたわよ。」
・例文四「セーター、買ったわよ。」

例文三の「セーター」は、聞き手のためのセーターであると多くの人が想像するだろう。この後に続く発話として、「着てみない。」と試着を促すかもしれない。一方、例文四では、この「セーター」は、話し手自身のものであったり、また、話し手でも、聞き手でもない第三者のものである可能性は、例文三に比べて高い。このように、「～てくる」は、過去の事実を話題にしながらも、それを現在の話し手と聞き手が存在する場（話場）に提示する機能がある。これは、「来る」という動詞が、話者の発話／指示時点での起点、つまり、動作終了時に話者が居る地点への移動を意味するからで、補助動詞「～てくる」となっても、この視点の取り方は、変化しない（森田一九七七）。前述の「～てくる」の持つ話し手から聞き手への積極的な働きかけの談話機能は、外国人の日本語学習者には、理解が難しいようである。なぜなら、文型自体が持つ表現機能というより、文脈に依存して、談話の中での使われ方によって、その伝達機能が決まるので、辞書的意味を覚えるような学習の仕方では、習得できないからである。

これまで述べた日本語の「～てくる」に類似した用法は、ニュージーランドのマオリ語の方向指示語に見られる。マオリ語には、四つの方向指示語、話し手の方へ（mai）、話し手から離れて（atu）、話し手に向かって下へ（iho）、話し手から上の方へ（ake）がある。このうちmaiは、物語が語られる時にも、「話し手がいる所から」というように話し手の存在場所を起点とする意味で用いられることがよくある。これは、日本語における「～てくる」と似た役割をしていて、談話参与者指標と一般的には呼ばれている。さらに、「来る」は、マオリ語ではhaere-mai、「もらう」はhoo-mai、というようにmaiは主観的方向性を示す役割をしている。そして、それぞれの動詞の意義素、「来る」においては〔物の所有権の移動〕、「もらう」においては〔物の所有権の移動〕と組み合わされて、「来る」や「もらう」という辞書的な意味のあることばとなっている。この方向指示語は、「おっしゃる」をkoorero-iho（kooreroは「話す」）というように、「地位の高い者が低い者へ言う」という敬語的意味にも使われる。すなわち、それは、空間的直示性が、社会的直示性を表わすことばへと使用範囲を拡大していった結果といえる。

前述の考察から、日本語の対話における聞き手の存在は、談話構造にすでに組み込まれていて、日本語の対話の特徴となっている。

公開座談会
大和和紀氏を囲んで

大和和紀氏を囲んでの座談会は、本学教授後藤祥子先生に司会をお願いし、『あさきゆめみし』の各場面をスクリーンに投影しながらの質問という形で始まった。やや照明を落とした教室で、光の中に大きく映し出される数々の場面には、紙面で見るのとはまた異なった美しさがあり、改めて『あさきゆめみし』と源氏物語の魅力に気付かされることとなった。

座談会の出席者からの質問は、最初はやや遠慮がちなところがあったが、次第にそれぞれが抱く『あさきゆめみし』への想いがあふれ出し、スクリーンの画面が変わるたびに次々と大和氏への質問が浴びせられた。氏からはペンネームの由来から執筆時の苦心談、光源氏の造形や登場人物の描き分けなど、普段なかなか知ることのできない貴重なお話をうかがうことができた。

後半は会場からの質問を受け付けた。立ち見が出るほどの参加者の中からは次々に手が上がり、予想を上回る活気に満ちた応答となった。質問も『源氏物語絵巻』の構図と『あさきゆめみし』の関係について、など深い読み込みをもとにしたものが目立った。また、他大学の学生や付属校の生徒からの質問があったのも、特筆すべきことであろう。

約二時間の座談会は、時折会場が笑い声で包まれる和やかな雰囲気の中で進行し、最後に大和氏

から研究室へ『あさきゆめみし』豪華本がサイン入りで贈られた、と伝えられ、氏への感謝の拍手のうちに終了時刻を迎えた。

「あさきゆめみし」より　光源氏と紫の上

大和和紀氏を囲む座談会に参加して

高野　晴代（新24院14）

娘と競って読んだ『あさきゆめみし』の著者、大和和紀氏との座談会は、そのメンバーに加えて頂くことになって以来、日々待ち遠しく思われました。大和氏をしっかりお迎えし、楽しく有意義な座談会になるようにと、後藤先生が打ち合わせの会を計画され、院生の廬さん、学生の小野さんと話し合い、作品の各場面を画面に映し出しながら、お話しを伺う企画が立てられたのです。実は私の勤務先（星美学園短期大学）の学生からもいろいろ取材しました。次第に待ち遠しさは責任感に変わり、大変なことをお引き受けしたと思うようになっていました。よい質問を考えるために『あさきゆめみし』を熟読しました。

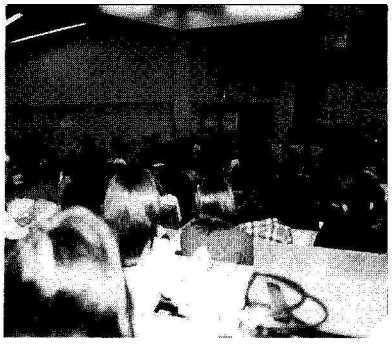
そして当日。大和氏の『源氏物語』への熱い想いに心打たれました。紫式部の意志にできるだけ近づいてというより、むしろ、ご自分に引きつけて描く作品の再構成の方法に、作家ならではの創造の秘密を、私たちは知ることになりました。

藤壺を象徴する月の存在は、準備段階から気になっていました。座談会の中で、それぞれの巻の絵を合わせた時、その「若菜上」巻の月は、まさしく「朝顔」巻の雪景色を照らす月に重なったのです。『源氏物語』のテーマに関わる世界が描き出され、大和氏の深い読みが『あさきゆめみし』を支えていることもまた、感じました。

座談会に参加させて頂き、前日までの責任感は、すばらしい充実感になりました。「こんなに専門的な質問を受けたのは初めて。でも楽しくお話しできました。」と大和氏におっしゃっていただいたことは、こちらもほんとうに嬉しいことでした。『源氏物語』の魅力を、今『あさきゆめみし』によって、多くの人が知りました。この作品を通して、さらに原文の魅力への道が広がっていることを感じたのは私だけではないでしょう。

質問に答えられる大和和紀氏

会場をうずめた参加者



報告

文学散歩（日本女子大界隈）

十月二十八日（土）、成瀬記念館の秋山倶子氏のご案内で、まず創立時に建築の「成瀬先生旧宅」を訪れる。築後百年を経てさすがに老朽化が激しいが、屋内にはご愛用の本棚、ベッド等、生前のままに保存、二階への階段の手すり代わりのモールは、女子大設立資金面における強力な協力者で評議員でもあった大隈重信侯の、不自由な足を思っての架設という。「成瀬記念講堂」（明治三十九年建設）中央に据えられた「成瀬仁蔵胸像」は、死の直前の面会から十四年、多くの試作を重ねたあげくの完成という高村光太郎の代表作のひとつである。「成瀬記念館」に展示中の「日本女子大学百年の歌」見学など、いずれも秋山氏の懇切なご説明を得て、創立者成瀬先生を彷彿させられる数刻であった。

桜楓会館での昼食後、成瀬先生、茅野雅子先生（明星歌人・本学教授）の墓参。徒歩十分の芭蕉庵にて最古の芭蕉像、永青文庫で能面、能衣装に接する、という実り多い半日であった。

（新3　新妻佳珠子氏記）

文学散歩は毎年十～十一月の土曜日に催します。「国語国文学会だより」夏の号でご案内しますので、是非ご参加ください。

卒業生の著作

「母の手　詩人・高田敏子との日々」

久富　純江（新8）

平成十二年三月　光芒社刊

さりげない言葉で戦後の詩に独自の世界を築いた高田敏子を、身近に過ごした娘の視点から描いた回想記。戦後の混乱を、手先の器用さを生かした洋裁や持ち前の決断力で切り抜けながら、心の支えとして書き始めた詩についての歩みや迷い、闘病など、新聞家庭欄の連載詩で多くの読者を育てた詩人の姿が、七十四歳の生を終えるまで、家族との関わりの中で描かれている。第二章「母の手」には、昭和二十三年、付属中学入試の親子面接で感極まり涙を流す母、また入学式に、母に袴を染め直して作ってもらった紫色のセーラー服で臨んだエピソードなどがある。

・著書を刊行された方はお知らせください

◆編集より

会員名簿が出来ましたのでお届けいたします。先の「たより」二十号、二十一号でお知らせしましたように、平成十年より、会費を二年滞納された方には、経費の節約をはかるため、三年目からの「たより」発送を中断させていただいております。ご希望により再度発送いたしますので、お友達に該当される方がおいでしたらその旨お伝えください。

尚、今号は、企画の性質上、お招きした講師の先生のお話をそのまま採録出来ませんでしたので、報告と写真、イラストで構成いたしました。

◆『国文目白』最新号をご希望の方は葉書で研究室あてお申し込み下さい。

＊研究発表会　発表者募集

・日　時　平成十三年十一月末～十二月初めの土曜
・発表時間　三十分
・応募資格　本学国語国文学会会員
・応募方法　四百字以内に発表要旨をまとめ、論題とともに申し込む。
・応　募　先　日本文学科研究室「国語国文学会秋季大会研究発表者募集係」
・締め切り　平成十三年九月末頃
・選考方法　国語国文学会において選考、結果は後日、個別に連絡する。

二〇〇一年三月一日
発行・日本女子大学日本文学科
国語国文学会卒業生の会
〒一一二―〇〇一五
東京都文京区目白台二―八―一
日本女子大学　日本文学科内